

関わり合うことを取り戻す活動

記録：田山志織、大内成美
編集校正：神長唯 近藤牧子
聞き取り場所：旗野住研
日付：2018年9月1日

【旗野秀人さん】

安田町で家業の建築業を行いながら、新潟水俣病の患者支援を行う。潜在患者の発掘運動や水俣病第2次訴訟原告団に加わり、新潟水俣病被害者の会安田支部となるが、独自の活動も並行して行う。映画『阿賀に生きる』の仕掛け人であり、水俣病問題は文化問題であるとして、ゆるやかなネットワークづくりを目指す。

【市川新美さん】 安田患者会に所属。



差別や偏見による村人の分断—嫌がらせを受けた切なさや悔しさ

旗野さん：まあ、差別や偏見がひどかったっていうけども、新美さんだって初めて裁判やったわけだけども、その裁判やり始めたら、なおさら差別偏見がひどくなったじゃない。

市川さん：そうよ。

旗野さん：「村の恥さらし」みたいに。

市川さん：そうそうそう。

旗野さん：そういうのを具体的にいうと、多分一つ二つ（目の訴訟）あたりの話になる。

その裁判やった時の、要するに嫌がらせとか、うん。

市川さん：嫌がらせね。いやあ、金欲しさに、裁判やってるって言われたしね。まーだ金儲けにいぐんだがね、つらあで（面当て）みたいに言われたりね。

旗野さん：もう、もろですね。金、金儲けのためってね。金儲けのために行くってね、もろですね。よくほら、タメさんが、裁判行くにはみんなでバスをチャーターするんだけども、まともな道路歩けないから。

市川さん：まだ行くんだがねって言われっすけ。金儲けにまだ行くんだがねって言われっすけ、まともな道路歩がんにの。それで、田んぼ道歩いてたんどり（辿り）ついて、バスのいる時たんどりついたりしたもんだに。して、道路こう歩いてくると縁側からこういう風に伸びあがってみて（身を乗り出して除く様子）、あらまだ行くんだわって言うようにこうやって伸びあがって見て。我々小さなってこうして隠れて歩くようにしてるども、やっぱりそうゆう風に、ほら、なんと言うかねえ、羨まし、なんていえばいろいろね、うーん、おら隠れて歩いたからに、うちの中からこうやって伸びあがって見てる人、バカにするって言えばいいが、なんて言えばいいかねえ。まあ、そのまんまです、バカにしているっていうか、でその、貰われもしねのに、金なんかそんざ。

旗野さん：貰われもしねのに、勝たれるわけがないのに、そういうして一でで行ってるって。まあ、一口にして言えばバカにしている、それだね。

で、覗いて言ってる人も実は、みんな被害者なんです。みんな仲間なんです。

（思い出したように）これ、もうちょっと話を進んでからであれなんだけども、この前ほら、高野さんから言われたあれを、市川さんにまた確かめてくれて、また来たわけよ。

市川さん：またがね。

旗野さん：ほらこうやって（笑）（市川さんが活動に）非常に非協力的なんです。共闘会議の依頼の大事な話に。なんでそんなこと参加



なんですか？ 今頃になってって。

こうやって、これね、ちょっと覗いてほしいんだけど（地図を出して）、約 100 戸、千唐仁集落です。ほとんど色がついてくんです。で、真っ赤な印は認定患者 7 人しかいないんです。最初まだ大騒ぎになる前です。わかっていったとき（多くの人が病気の症状を発症したとき）に認定になった。それから新美さんたちが二次訴訟という事で動き始めたら今みたいなことで差別状況が生まれるんです。二次訴訟が終わってから、医療保障だけ特措法とか、その後いろんな手立てで訴訟が起きました。だから水俣病患者って種類いっぱいあるんだけど、何らかの患者ってことで印付けると、ほとんど埋まるんです。ほんでこっそりやっている人は、共闘会議での情報もないし我々も知らない人もまだあるんです。当たり前ですけども、ほとんどの人が魚食ってます。症状があるって言ったらまず、びっしり埋まるはずなんです。

ここがですね、村の真ん中の辻で、この交差点にムシ地蔵のご本様が祀られます。でここが、裁判に行く集合場所なんです。メイン道路なんですよ。ところが今の新美さんのお話のように、ここを通れないからあぜ道の遠回りを通ったりとか裏道を通ったり、そうやって裁判に参加したんです。それでもみんな覗いてって、金儲けに行くんだかねって言ったのですが、そのくせ、こそこそと嫌味を言った人たちが、実はこっそりその後、医療手帳をもらってたりするっていう、そういう現実です。さっき新美さんの話で出てたんですけどもね。

市川さん：そうやって嫌味いってた人も我々と同じに金貰てるがね。そして、まじめにやってきた人、ばかばかしいわね。やっぱり人をほら、バカにしたりして、されて、同じね。金貰ったりしてんだよ。くやしい、ってところもあるわね。んだとも、同じ村の中において、そうゆう風にくら差別されていても今こうして金もろうていれば、同じ五分だね。それだがね。んー、おうた時は（会った時は）優しく接するよか他ないよね。今はしてもよっこんど、ほら、通り過んごしても言葉の駆け引きはあるようになったし、ほだな。ほんで、こう通っていくとこんだたてねえ。ちらちら増えて。

水俣の裁判やったでしょ？ なんか伝染病みたいに思われたのね。そこの家行ぐな、なんか言われて。でもさ子どもほど、言うだもんだね。

別に病ずら移らねえ、ねえ（苦笑）。

旗野さん：あの、（当時から）ずいぶん時間がたったから、まだこうやって穏やかに話できるような時間の積み重ねがあったと思うんだけど、やっぱり当時の気持ちといたら、ほんとについてこの前までは仲間だったのに、この事件の裁判が始まったとたんに、さっき新美さんがおっしゃったような状況が生まれてくるって言うかね。どれほどやっぱり切なかったか。言葉の暴力だけじゃなくてね、もうその、表情っていうか、「ぷんっ」と反対のほう向いたりとかね、それはもう本当に辛かったと思いますね。裁判が終わったら、一応和解っていう事で一時金 260 万くらいとかもらった途端に、ますます、「ほら、あの人なんかあんな元気なのに」みたいなね。

市川さん：「なに水俣なろうば」って陰口きかれてね・・・ってゆうたのも、結局は最後にね、（お金を）同じに貰ってるんだもんね。

旗野さん：ああ、それがさっきの悔しいっていう気持ちもね。それは本当に当事者っていうか、切ない思いをした裏返しとして、悔しいって気持ちは正直な気持ちなんじゃないかなと思うんですね。

で、つついこの前もですね、共闘会議からですね、もう一回その再調査みたいなことで、この地図を見て確認してくれと依頼されました。で新美さんは「ほんな裁判終わって何十年もたつのに、何のためにこんなことやるんだね！」っていうから「新美さんそうじゃないんだよ、患者さん方が切ない思いして闘ってきた、運動してきた成果で、その後みんなこうやって救われてるんだよ。だから、悔しい思いもしたかもしんないけども、その成果がこの地図なんだよ」って言ったの。したら、「ああそうかね」みたいなことで。

なんていうんでしょうかね。辛い思いをして、一定の成果もあったっていうのも知ってるんだけど、やっぱり本当に辛い思いをしてきた人たちにとってはなかなか我々支援者みたいなレベルのように、正しい運動みたいなことで割り切れないのね。日々そこで暮らしてるわけですから。

お地蔵さん建てたときもほら、お祝い事だからとみなさんカンパ集めてたってときにも同じような話が出たってありましたよね。

市川さん：カンパ貰いに行ったら、「おめさん方、このカンパもろうて温泉いぐんだがね」言われたよね。そういうわけでもないのにね、そういうこと言われでは嫌だゆうて、もらっだ金をみんなけえしたんね（返した）。

旗野さん：ようするに、裁判終わってもなかなか、認定患者として1000万貰ったり、裁判やって和解して260万貰ったり、まだ申請すらできない人とか、もうほんとにいろんな水俣病患者がいるわけですよね。で、昔みたいに仲良くするためにはどうしたらいいかってことで一つお地藏さんの話が生まれてくるわけです。お地藏さんの話もね、注射一本打って治る、みたいな話じゃないんだけど。

人々の溝を橋渡すお地藏さんの建立—関わり合うことを取り戻して

旗野さん：4月24日のお地藏さん祭りのときにお坊さん呼んで魂入れのお経を読んでもらって、めでたく建ちました。念仏講の人たちはね、団子あげたり花あげたり、もう嬉しいもんだから、誰も反対なんてできない雰囲気になりました。

それでめでたく建って、お祝いの会、披露宴会やるときに区長さんが「今日は村のお祝い事だから」と、外部の人が使うときは500円だったかな？使用料があるのですが、それは「今回はいりません」って言ってくれたの。ほんでみんなもびっくりしました。私もびっくりしたんですけどね。

今まで患者の会は、村の人たちが中心になってやってるんだけど、外部の人間扱いで有料になってたの。それがお地藏さんのおかげで、「今回はいいですよ」と言ってくれたんです。今回ってというのはそれを機会にしてその後ずっと無料になったんです。

要するに、大きな建前論の運動の、裁判の成果みたいな事じゃなくて、村の人たちにとってはこのお地藏さんを建てたってことがね、良い話も悪い話も起きるんだけど、何よりも、やっぱり認められたっていいですか。この申請運動から始まって二次訴訟やって和解やって、その後もお地藏さん建てたりすることが、ようやく村の人たちに認められた、ってのがそのお地藏さんがきっかけかなあというか。事の評価というようにとても大事な話だなあということ。みんな地藏さんは大事にしてくれてるよね。

市川さん：そうだね。

旗野さん：賽銭のあがりは少なくなったけど(笑)。でも意外とあがってるんだよね。

市川さん：はじめのころはね。

旗野さん：ま、でもほら、Bさん。念仏講の、もう亡くなったけども。そのBさんがいつもお地藏さんの世話をしてくれていたんです。でも、Bさんも裁判に参加しませんでした。でもこっそり申請はしたかな？俺問診はした覚えあるんだわ。だからこっそり貰ってたんだらうね。裁判は出なくてもね。詳しい事情は分かんないけども、とにかくね、自死したんですね。その後。

市川さん：(賠償金を)もろだ、嫁さんがもろだっていったな。かあちゃんね、今のばあちゃんね。

旗野さん：はいはいはい。だから、そのずっとお地藏さんを大事にしていたBさんっておばあさんが亡くなって、だれが世話してくれるんだらうって思ったら、こうやってね、昔ながらのミノ笠まで編んでくれる人はいなくなったけどもね、ハンガーストライキ起こしてくれたばあちゃんは、ちゃんと冬になるとね、子どものジャンパー着せたりとか帽子かぶせたりとかね。そういうのは繋がっていきっていうか。それはそれでありがたいことだなあと。

市川さん：とちをなれば、今の若母ちゃん死んだトシさんの奥さん。ほら、なんて彼岸とかお盆とかになると、お皿にお供えもんあげてくれたり。

旗野さん：最初はBさんも反対したんだけどね、もう、絵本できたり、そのお地藏さんのおかげで(小学校)5年生の公害授業で、お地藏さんの紙芝居を読んだりとかやって、要するに美談になるわけでしょ。だから彼は、そのおかげって言うわけでもないけど、いつも(選挙で)トップ当選なんですよ。まあ、一番の理由は農業やってる人の票なんだよね。昔からのおじいさんの代もさかのぼってね。

市川さん：そうそう。

旗野さん：そういうお家なんだけども、でも一時反対した人たちがもう反対できないような状況が生まれている。だから逆に礼を言われたりっていうかな、まあ、あの毎年時期になると水俣の甘夏ミカンをお供えすると同時に、市川さんのショバ代として、ちょっと届けたりするんですけど。やっぱりそういう関係っていうかね、大事っていうか。

東京で出会った新瀨水俣病問題—映画を作るきっかけ

旗野さん：かなり個人的な話になります。1971(昭和46)年に初めて(熊本水俣病患者の)川本輝夫さんと会う

んですが、私は21歳でした。で、家出をするつもりで三里塚に行こうとしたんです。当時、1971（昭和46）年という、三里塚の成田空港の闘争の真っただ中、一番闘争の激しい頃で。それで、いてもたってもいられなくて、こんなところで大工やってる場合じゃないって思ったんです。21歳ですから。で、書置きして出ていきました。

東京駅に降りたら、たまたま川本輝夫さんたちが、初めて（チッソの）東京本社交渉に出てきたところでした。71年の暮れで、社長に面会を求めただけけれども、会ってくれないわけです。で、まさか彼らがそんな一年半も本社前に座り込んでいるとは思わなかったただけけれども、もうとんでもない事態になっていて。たまたまそこに出くわしたんですね。その話すると長くなるんで端折ってしゃべるんですが、旗野は、本当は三里塚行こうとしたんだけど、その前段でなんか怪しげな集団に出会ってしまって、上野英信や、原田奈翁雄だったかな、当時雑誌『展望』（筑摩書房、1978年終刊）の編集長で、この2人が患者さん支援の一週間ハンガーストライキをやったの。で、なんだか事態はわからないけれどもそこに座らせてもらったら、まあ、色々な人の話とか状況を知ることができました。71年9月に新潟水俣病の一次訴訟の判決が出たんです。四大公害裁判の先駆的な判決でした。それまで農業原因説で、昭和電工は（自社の責任を）認めなかったんです。それを初めて認めたので画期的だったのですが、旗野にとってはなんかよそ事だったんです。

というのは（旗野さんの地元である）、中流域の安田からは患者さんは出てなかったんです。あくまでも下流の「農業説」で争われてたから、行政は実は逃げてたんですね。ただ、係争中ってことで公表してなかった。で、ハンガーストライキを一緒にしていた川本さんに、「あんた、こんなとこ来てる場合じゃないでしょう」みたいなことを言われて、「安田はどうなってんですか」って言われたけども、答えることができなかったんです。まったく知らなかった。まあそういわれればそうだなあってことで、一週間くらい経ったし、嫌な大工のことも心配になって地元に戻りました。

映画『阿賀に生きる』づくりの経緯—宝もんの患者さん話を伝えたくて

旗野さん：戻ってきた72年の1月、まさにタイミングが良すぎて、町からも認定患者が出るんです。千唐仁の7人です。72年ですぐに認定になった人も入っていますが。ビックリしてああ、やっぱりうちの町にも患者はいたんだなってことで、地元をまわり始めるのがきっかけですね。それがきっかけなんだけど、どっかで石牟礼道子さんの『苦海浄土—わが水俣病』（講談社、1969年）を読んだりとか、土元典昭さんの記録映画「水俣—患者さんとその世界」（1969年制作）ももう観てたりして、頭の中ではそういう重症な患者さん、胎児性患者さんのイメージをもって接したんです。ところが、目の前にいる患者さん方が全然、（市川さんの肩に手を掛けて）こんな（水俣病患者に見えない）普通の「ニセ患者」（笑）なわけです。で、最初に訪ねたのがここんちの真向かいの市川キヨミさんっていうお宅なんだけれども、ばあちゃんに話を聞きたいと言ったら断られました。水俣の話なんかできるわけないって言われて。ボランティアの気持ちで行ったのに、断られたことですごくショックで。でも「まあ、普通のお茶飲み話なら来なさい」って言うてくれました。ほんとは優しいおばあちゃんでした。で、そこから運動のきっかけができて、新美さんとか向かいのうちのばあちゃんに声かけられて仲間になりました。まあ、その辺の話はまた本人に語ってもらいます。

で、映画の話です。本人申請制度が患者さんにとっての壁になっているっていう辺りから、申請をする運動を10年くらいやるんです。棄却になって、（熊本水俣病の）川本さんたちのような行政不服審査請求を地元でも真似しようとするんだけど、そのなかで言われる言葉が、いわゆる専門家の、何て言うんですかねえ、いかげんさ。「高度な学識と豊かな経験を軸にしてあなたは水俣病ではない、と判断しました」みたいな、とんでもない言い方なんです。新美さんも「なんで？」ってなるわけです。でも、「隣のばあちゃんは認定になっているのに、なんで私は認定にならないの？」っていう素朴な疑問に誰も答えられないんですよ。それが、〈勝ち目のない無駄な〉って言われてた申請運動です。行政不服（審査請求・訴訟）が20年くらいある



んですよ。

その時に私が、目の前の患者さんと付き合ってるとき思ったのは、なんで新潟は、石牟礼（道子）さんのような、あるいは桑原史成のよ

うな、ユージン（・スミス）のような、いわゆるそういう表現者がいないんだろうということでした。四大公害裁判のような、そういう運動への評価は高いけれども、要するに私が直に接する宝もん話。「阿賀に生きる」観てくださってるかはわからないけれども、こういう水俣病患者、原告番号何番、患者さん A、B、C じゃなくて「市川新美」っていう、患者さん以前のお人柄の大事な話とか、豊かな話とか面白い話ってのが水俣病であるかどうかって言おうとすると、ほとんどみんなね、抜け落ちるんですよ。で、もったいなくて、やっぱり患者さんの宝もん話をどう伝えるかっていうのは運動のスタイルではないんだな、って思ったんです。やっぱり、この宝もん話をまず残そうっていうのが、今回 35 年ぶりで聞き書き集『あがの岸辺にて』の復刻版ができました。今回の編集長は小林知華子さん（冥土連）なんですけれどもね。1981（昭和 56）年、裁判をやる一年前ですね。当時、ガリ版刷りで聞き書き集から作り始めたんです。復刻版は千円で売ってます（笑）。だんだんね、売れない品物をただで人にあげて、ではなくてちゃんとビジネスしてるんです（笑）。これが文化活動のきっかけです。要するに、宝もん話を、阿賀野川の上流、中流、下流のそれぞれの生活者の話を聞き取ろうということです。

忘れもしないけれども、82 年に裁判が始まることになると、マスコミも動くわけです。私もインタビュー受けましたが、「いよいよ裁判ですね」と言われても、正直いうと裁判なんてもう行政不服を 10 年も 20 年もやったらうざりで、「私は裁判が終わったときのことをこれから準備したい」って答えたら、「え？ いや、そうじゃなくて裁判に臨む一言を」って言われたけど、「いやあ、みんなやりたがってるから仕方ないっていうか」と答えましたが当然、カットされました。裁判終わったあとのことを準備したい、というのが 82 年ですね。

2 年後に、佐藤真監督がたまたま「無辜なる海」（1983 年制作）という熊本水俣病患者のドキュメンタリー映画の上映運動に来るんです。向こうの友人からとりあえず新潟行ったら旗野を訪ねろと言われたそうです。そしたらタダで酒飲ましてくるしタダで泊めてくれるからと言われて来たんです。もう嬉しくて、初めて会ったその日から二人で一升瓶 2 本くらい空にして、語り明かしましたよ。要するに、飛んで火に入る夏の虫で。まあ、私にとってはなんでもよかったです。写真家であろうと、文章家であろうと、映画家であろうと。それがたまたま映画監督である佐藤真が、飛んで火に入る夏の虫でやってきたからあの映画の世界の話をし始めたんです。「まあ実はね、みんな表現者は水俣に行っちゃうけども、新潟にもね、実はあるんだよ。こんな話こんな話…」ということで彼を連れ回して、84 年から 92 年の完成まで、よく佐藤監督もここに通ってくれました。

89 年で阿賀の家を、二次訴訟の原告の方の家なのですが「三川は雪が深いところだから、もう 90 近くてそこでは暮らせないから、旗野さん映画を作る話だけれども、よかったら使って」って言ってくれたんです。もうね、話がね、どんどん良い周り方し始めましたね。で、阿賀の家をそこで借りて、3 年間住み込んで、みんな素人の集団なのにできたらすごい賞をいっぱいもらいました。映画制作に 4,000 万かかったのですが、ちょうどバブルだったから、一口一万円のカンパで 3,000 万集まりました。ところが 1,000 万借金があったんです。それが、なんとかなんとかっていう映画祭で 1,000 万もらって、全部返せて、赤字なしの映画を初めて作ったんです。しかもいろんな外国の賞をもらったり、ドキュメンタリーで劇場全国上映するのも多分、初めてだった。ちょっと余計な話もできましたけれども、自慢したいわけです。（映画をつくるきっかけについて、は）良い質問でした（一同笑）。

“知らないうちに”安田患者の会メンバーに（市川新美さん）

旗野さん：「安田患者の会」に誘われた時、なんの集まりかわからなかったけれども、呼ばれたから行って見た、みたいな始まりだったじゃない？ 不本意ながら。その辺りの、だまかさった（騙されて入会された）話からしたらどう？（笑）

市川さん：おれもあの頃、体が弱かったんだよね。胃潰瘍やっててね。で、ちょこちょこ会社休んでたんだよ。したら前の家のばあちゃんがさ、おれんところに面白い話、明日、友達もいっぺー来てるすけ、きてみなせえって、夜、呼ばれたの。行って見たところ、男の人ばっか。旗野さんもいたんだっけか。旗野さんと皆川和男に、それから権瓶晴雄と、市川丈夫もいただろうかね。それからあとは当時の会長の鈴木勇さんもいた。で、なにがなんだか。別になに、なんの話もないのに。他の人しゃべってたのをちゃーんと聞いてるくらいのもんで。なんの話もない。そんなにいいかげん 30 分以上、こんで一時間位経つだろうかねえ。板倉吉栄さんが面白い話笑って話してて、別になんの話もねえで帰ろうわと思って。なんで呼ばれたかわからない。

旗野さん：それはもう入会した、ってことなんです。

市川さん：それが入会か。おれ一度も入会したとも、入るとも言ってない。

旗野さん：巧妙な手口なんです（笑）。

市川さん：入るとも、仲間してくれだともなんも言ってないのに。お茶だけはもろうたけどもね。それから今度はちょこちょこ、こっち来てくんなせえ、あそこも行ってくんなせえて、はじまったがね。新潟行ってくれだの、何だかんだってことが。変だなあとと思ってたね。なんでおれそんな頑張んねえとならないのって思った。ところが、それが水俣（病の患者会としての活動）だったんだねえ、今になってみると。入ったおぼえもないのに、水俣患者にもなってないのに（一同笑）。

旗野さん：入った覚えもないのに、何十年も40年もやって、原告にまでなってるんだもんね。それは巧妙なだまし口ですよ（笑）。でも、新美さんは、地元で集団検診をやるかかっていうかさ、大和の集落センターか下越病院ルートで申請はしたわけですよね？

市川さん：そう。下越病院にも行ったし、齋藤（恒）先生のところにも行った。最初の診断は下越病院の富樫（昭次）先生、90歳になった先生。それからしばらくしてから齋藤先生のところ。

旗野さん：多分、齋藤先生は行政不服がらみで診てもらったとこ。申請の診断書は富樫先生が出してると思う。でも富樫先生で診断書が出なくて齋藤先生のところに回った可能性もある。申請の診断書ってどっちなんだかな。齋藤先生だった、診断書を書いたお医者さん？

市川さん：齋藤先生だったろうかねえ。

旗野さん：微妙に、富樫先生も「ミニ（認定）審査会」になっちゃってから「感覚障害だけだとダメだ」みたいなことでね。120人の半分くらいしか申請できなかつたはず。結構厳しかった。そこから落ちた人をまた選択するのでもた回ったりして。かなり申請はしたんですけどね。

新美さんと構築した「冗談が言える関係」

旗野さん：新美さん、あっちこっちの大学を回って講演までする人が、こんな正直にしゃべっていいなんて言ったら！

市川さん：はじめはそうだったけども（大爆笑）。さて、「なにか語りね。なんか言いね」って言われてっけども、自分が実際やったこと、触ったことしか言えねえわけでしょ。話を作ってなんか話せねえ、おらみたいなバカはねえ（アハハ）。

旗野さん：バカがいいんです。みんな利口なふりはしてるけどさ。新美さんはホンモノのバカ（笑）。かれこれ40年も付き合ってるんだけども、こういう（冗談を言い合える）関係がやと築けるようになってきた。要するに、正直に「嫌だ」と言えるわけです。今回（のヒアリング）もですね、（新美さんが）「旗野さん、勝手に引き受けたんだから、あんた一人でやりなさい」なんて平気で言うんですよ。でも俺は、絶対最後は来てもらえるなあっていう確信っていうか。長い付き合いで、意外と今回は来てもらえそうだなっていうのはあるんです。

実は新美さん、この事務所に来るのは初めてなわけですよ。終わってしまえばいい話に展開するんです。だって、はなっから新美さんが「一人でやれ」って言ったのそのまま受け取ったらさ、（患者さんへのヒアリングを依頼してきた）あおぞら財団に「今回だめみたいだわ」って断らないといけないわけです。まあ、でも正直に「新美さんは来ないって言ってるけども、多分来てくれると思う。ただ、当日のお天気と一緒に、なかなか読めないところはある。でも、来てくれそう」みたいなお返事になるわけです。そういう話が良いんであって。この、だましあいが好きなんですよね。当日までハラハラで。

新潟大学で講演した「宝もん話」

旗野さん：最高なのはほら、新潟大学の何百人も入るマンモス講堂にだまして連れてった話です。

市川さん：本当にあの時はショックだった（一同爆笑）。ショックっていうかさ、足がガタガタガタガタ。机の足んどこに自分の足が当たって、なんでこのボトル揺さぶれんだろうって思って自分の足あがってしょうもねえ。これが揺さぶれてんのかと思って。



旗野さん：最初に出た板倉ハツミさん、今はもう寝たきりだけど、あの頃はまだしっかりしていて、先輩でもあるし、とても頼りにしていたんです。新潟大学の講演の前に、新潟市の保健師さんが、わざわざ新美さんのとこに来たいと言ったんです。要するに、事前に挨拶に連れて行って。そんな挨拶になんて来るとなおさら話が面倒になると私は思いました。でも、来たんだよね。その保健師さんも心配で、事前に説得に行きたいわけです。任せとけて言ってさあ。お茶飲み話1時間もしたのに全然本題に入らない。で、保健師さんが「そろそろ旗野さん時間なんだけれども、ほら、本題」（旗野さん）「いや、大丈夫だよ。もうバッチンだよ。こうやってお茶のみ話一時間もしたんだからバッチン。帰ろう」っていったら、「いやー、せめて少しくらい話しとかなないと心配でしょうがない」と。そこで（新美さんが）「で、なんだね？」とか言って。（旗野さん）「いや、この前とおんなじでさあ。大学に5、6人集まって、ステージの上で今日みたいにこたつかけてもらってさあ、お茶のみながら話すようなまあ、こじんまりした会で…」とか嘘を言って。本当は5～600人のマンモス講堂。

市川さん：しゃべろって言われたってしゃべられるもんでもない。そげな人の前出たことねえ。井戸の中の蛙でしょうもねえべさ。

旗野さん：会場の講堂のドア開けたんですよ。ドア開けたら、もう階段状で、「うわあ」って言って、そこから動かないわけ。まず二人、「騙したなあ」って。もうここまできたら覚悟しなさいってんで、それを無理矢理背中を押して押して。もう、壇上にはみんな揃ってたんです。ちょうどね、水俣からも胎児性の患者さんが来たりして。新潟の患者代表として、新美さんとIさんと二人は。ほんでなんか、まあ、ステージに上がったんですよ。もう、二人してガタガタガタ。「だましたな、だましたな」って。で、仕方ないから開き直って、最初、水俣のNさんたちがしゃべったの。そしたらね、やっぱり会場で泣いて聞く人もいますわけですよ。とても辛い話だと。それで、「では次、新潟の」ってなったけど、全然二人とも震えが止まれないわけですよ。ずーっと震えてんの。仕方ないから私が先に、「すいません。今日は二人を騙して連れてきました。まだ震えてます。ひょっとすると二人はしゃべってくれないかもしれません。仕方ない。これも現実なので、二人がしゃべらなかつたら私が代わりにしゃべるしかありません。もう腹をくくってきました。でも、せっかくだから、ちょっとだけマイクふってみますね」と言って渡しました。それでもう仕方ない。新美さんも「嫌だ、嫌だ」言ったけど、「新美さん、ほらほら、例のあの、ほら孫のカレーライスの話、あれほんとに俺好きなんだけどさ、あの話ちょこっとしてほしいんだよね」と頼んだら、新美さんが「あんな話でいいんだかね」と言ったんです。お、これ、しゃべってくれそうだなって思いました（笑）。

これいい話だから本人から直接、今から聞きましょう。特別スペシャル、あの話です。

市川さん：孫ねえ。4年生くらいだったろうかねえ、いっちゃん下の子ねえ。そこそこ薄暗くなって帰ってきて、寒い頃だった。寒い秋先の、うっすら雪の降る頃だったわね。「ただいまー」って帰ってきたから、ああ、「おかえりー」ってそれで、「あ、ばあちゃんカレー？ 僕はカレー、大好きなの！」「おお、お前カレー大好きだすけ、作ってたよ。」ってそこまでは良い話だけどね。ふふふ。ところが、「肉ちょっと足らなかつたから、ばあちゃんが指削いで、肉いれて、おいしいよー」って言ったの。したつけショックだったんだね。ふふふ。何、そんなときね、この指ね、大根を削ったら、手まで削ったからカットバン貼ってちょうどそれで、ぴったりになったさね。

旗野さん：そのときも実はね、カットバンいくつかしてたの。要するに感覚障害だから、よく指を切るんだって。それを冗談っていうか、キツイ冗談で、〈肉足りないから、指をカレーにいれた〉って。孫もビックリするわけでしょ。

市川さん：孫にそげな感覚障害あるなんてことわからねえでしょうよ。4年生だったしね。

旗野さん：それで夕方、食べるときになったら、両親に怒られたたんでしょ？その話。

市川さん：それで、夕飯できて、テーブルにみんな座ってね、みんな（皿を）空け始めたの、その子にも盛ってあげたけど、箸そこへおいて、ちゃんと一人で、ひとさじとも食べなくてさ、いつになってもこんなしてるからそれを見かねて、「お前どうしたんだ。どっか悪いのか」って親が聞いたら、「あのね、このカレーね、ばあちゃんがね、肉が足らなかつたから、ばあちゃんが指削いで入れたの、そんなの僕、食べられねえ！」って。したら、親がさ「ばあちゃん、冗談もほどほどにしてくれ」って。子どもも本気になって。それで親が子どもに「それは、ばあちゃんの冗談だよ」って。「全然ばあちゃんの指は入ってないんだよ」って説明したらたら、今度は食った、食った。こんなおかわりした。っていう、その話をしたんね。そしたら、みんなが会場中がわあーって大笑いだったんです。

旗野さん：いやだからね、これは実はとってもいい話で、そのまんまさらけ出したわけです。それでみんなも、会場もね、胎児性患者さんの話を聞いて泣いたりしてる人たちがみんなどっと笑うわけよ。でね、私がおのあとでフォ

ローして。実はね、今も新美さんカットバンしてるけども、新潟は感覚障害だけで認めるかどうかの話で、簡単にいうと「軽い」と言われてる。いつも、ずーっと水俣は重くて、新潟は軽いと、いろんな場面でいつもそう言われてる。でもね、そういうことなんだよ。だから、笑ってもらっていいんだけど、新美さんはそういう状態でも必ず若手が共働きしてるから、自分はその、市川家のちゃんと生活の要として、そういう炊事・洗濯っていうかな、自分でできることはちゃんとリハビリも兼ねてやってる。まさに身を削ってやってるわけですよ、本当に。だから、あの、見えづらいついていうか、そういう話を聞かないと、見落とすついでいうか。

あるがままの、その時の、今の関係の大切さ―「患者さんにどうなって欲しいか？」という問いを受けて

旗野さん：(患者さんたちにはどうなって欲しいとか) 特には望んでません。望むとがっかりするだろうし。そういうことじゃないような気がするんですよ。例えば、今日(のヒアリング)も、皆さんにどういう勉強してほしいとかはなく、オールマイティーに、なんでも良いわけです。この場を設けられて良かったなって。で、新美さんも来てくれたことが良かったなって。ちかちゃんも、服部さん(冥土連)も来てくれた。あとで、二人の話も聞いてほしいんだけど。

例えば、「阿賀に生きる」という映画も、「水俣病」という言葉を使わないで、水俣病の映画を作りたいかったです。要するに、水俣病について言いたいんだけど、水俣病と言えば言おうとするほど、私が思っている世界から外れていくんですよ。伝わらなくなっちゃう。はなっから何かたてると、余計外れていくような気がするんです。それよりも、ハプニングが良いじゃないですか。先程のように、こちらが質問、質問って何度も催促して、ようやく手が挙がったら「トイレにいきたいです」なんて(一同笑)。こういう展開が好きだし、さっきの新美さんの話もそうですが、とても良い話なんです。でも、当日までハラハラドキドキですよ、旗野だって。もうすごいしかけになってんの。新潟市の、新潟大学の企画とってお堅い大々的なものでも、終わってみたら最高に良い話で、何十年も経っても新美さん、あの話、あの話ってなります。でもそれは、なんだろう、どっかでそういうことにやっとなんか気がついて、新美さんもそういう風に接してくれるようになった。それが無駄な40年じゃなくて、正直な関係っていうかな、わがままな関係を築けた。これは、医者と弁護士、支援者みたいな関係ではあり得ないわけですよ。どっかで世話になってる、という負い目をいつも感じて。いや、そういつたって、いつもは(新美さんと)五分五分ってわけではないですよ。大先輩であるしね。でも俺ができて、新美さんができないこともあるし、逆もある。

だから、「患者さんたちにどうなって欲しいと思っているか？」は、とても良い質問なんだけど、俺はまあ、結局は水俣病を言いたいのかも知らない。それをこう、洗いざらいついていうかね。今まで俺がやってきたことや感じたことを全部とにかくなるべく提供して、あとはお好きなように。どのようにでも、煮て食おうが焼いて食おうが。どちらかという焼いた魚がいいかなー、できたらトゲがないほうがいいのかーとか。いや、強いて言えばそういう話になって(笑)。

いいかげんな答えになってるかもしれませんが、水俣病事件というのは、すごく幅が広がっているか、懐が深いっていうか、尽きないっていうか。すべてに関わっているような気がするんですよ。だからこそ、「なんとかツアー」みたいにスローガンがあると、それに囚われてしまう。それぞれの専門という切り口からでいいのかも知れないけど、受ける私としてはなんでもいいもんだから、もうそれこそ次の映画を撮りたいという人も現れたりとかね、なんでもいいわけです。

小林さんと服部さんが冥土連にかかわるきっかけ

小林さん：先ほどから話に出ている下越病院の事務職員です。でも、あまりそれは関係がなくて、もともと社会福祉の勉強を大学でして、その時にハンセン病問題と出会って勉強していました。自分の地元新潟を思った時、新潟水俣病の人たちも辛い状況だよなということで、勉強ををはじめました。そこで旗野さんに出会ったというか一方的に知ったのですけど。

社会福祉みたいな観点から見ると、旗野さんがおっしゃっていたように、テーマというか狭い範囲の中でしか勉強できないっていうか、関われないっていうか。よくないことだから、これを次に、別の人に広めていこうと啓発活動みたいなことをして、また起こらないようにしましょうという活動が、実はすごい枠組みの中にあるといえますか。

それこそ、旗野と同じで、ハンセン病の元患者さんと出会っているときに、すごい魅力的な人たちが大勢いるのに、

その人たちのことがあんまり伝わらないというか。特別な、とても切ない、悲しい思いをした人たちだとか言われて、(個々人が)魅力的であることが全然伝わっていかないのを疑問に思っていました。その中で旗野さんが広めてくれたことを知って、新潟の「阿賀に生きる」の人たちとか『阿賀の岸辺にて』の中に出てくる人たちを知って、こういうやり方、そういう関わり方っていうのがすごいしくりました。それまでは、ただ自分で勉強してるだけだったのですが、そうじゃなくて、旗野さんのそばで、水俣病に関わっていきたいと思いました。そしたら新美さんとかも仲良くしてくださるので今は楽しくて、一緒にいさせてもらってる感じです。

旗野さん:ハンセン病への関わりがきっかけだったと思うんだけど、今でも「群馬のじいちゃん、じいちゃん」って通っているんだよね。草津に栗生楽泉園っていう療養所があるんですけど、孫のようにしてもらったんでしょ？だから、ずっとそういうテーマもちゃんとか引き受けてるっていうか。自分のスタイルをちゃんと持って、こうやって手伝ってもらっている。まあだから旗野の回りの状況も本当に変わってて、さっき画面出たけども、うちの姉とかが家族ぐるみでずっと手伝ってくれるときもあったし、色々やっぱり波瀾万丈なんだけども、で姉の代わりにこういう人が現れたりとか。微妙に時期的にクロスもしてるんだけど。まあ、ギリギリセーフで、新美さん一人になっちゃったけども、こうやって、送り迎えしてもらったりだとかね。今はとても冥土連の要の人物になってる。

服部さんは、実は新潟出身ではないのです。

服部さん:私は「阿賀に生きる」の映画を撮った佐藤真(監督)とは長い付き合いです。東京にいたときに東大駒場に最首悟という先生がいたんですけども、その研究会、勉強会みたいところで佐藤真と一緒にした。1987(昭和62)年まで佐藤さんも東京にいて、1988(昭和63)年から実際に新潟に行きますっていうことだったんですね。で、僕ずっと熊本の水俣病の方に関わっていたんで新潟とはずっと縁がなかったんです。でも佐藤真がちょうど死んでしまって、そのお別れ会を旗野さんがやってくれました。で、そのとき初めて「阿賀に生きる」の映画が佐藤真(監督)や小林茂(撮影監督)がいたからできたんじゃないかと、旗野さんという人がいたからできたんだって実感できたのです。この人は非常に冗談も言うけれども、とても心配りができる人で。それからですかね、旗野さんと親しく接して。

20周年の時、ニュープリント版の「阿賀に生きる」をフィルムで作ったんです。上映会をやりだすと、今の冥土連メンバーたちが網にかかるわけですよ。旗野さんから、その人たちを絡みとりたいたいと言われ(笑)、策を労して。みんなその映画が好きだとか、芸術が好きだったとかいろいろな側面から「阿賀に生きる」を観ていたのが、だんだん旗野さんの魅力にはまってく。

裁判が終わって、旗野さんがこれから患者さんに何をしようかって時に、私たちは「ニセ患者」って言われて、温泉にも行けない、でも本当はカラオケにも行きたいし、旅行にも行きたいなって言ったんです。それで旗野さんが温泉に連れていったりとか、西会津の「会津ころり三観音巡り」というのを一回やったりしました。三回、回るとコロリと死ぬるという言い伝えの。そのあと長いことやっていかなかったんですけども、二回目はちかちゃんを中心となって、三回目もやって。一応、三回はやったということで、患者さんは「これでいつ死んでもいい」と言っていました。患者に寄り添って生きていくから、旗野さんが感謝されるわけだよね、患者さんに。それで最初に旅行に行った患者さんに「冥土の土産ができたわ」って言われたので、旗野さんの名刺にある「冥土の土産企画」ということをやり出すわけです。うちの「安田患者の会」の中心は、「冥土の土産企画」での患者さんと共に生きることで、それでさまざまな文化事業をやってるわけですよ。それに賛同した人たちを冗談で「冥土の土産全国連合」という名前をつくって。とにかく若い人が、来てくれたときになんでもできる場所を提供しようと思いました。僕や旗野さんと



か年上の人たちが、20代30代の若い人たちをサポートしていくシステムになっています。

旗野さん:もっともな説明だけど、実態としてはもう冥土連ってのは「冥土の土産企画」の全国連合っていう風になっていて、もうみなさんも会員なんですよ。ちょっとでもその空気を吸ったらすごい感染力なの。本人の自覚とか問わないんです。もう全部、私があなとも、と言ったら会員ですから(笑)。

服部さん:冥土連は「安田患者の会」の附属機関で、正直言って「安田患者の会」がなければ存在しないグループです。あくまでも「安田

患者の会」が中心だっということ。

旗野さん：(市川新美さんに向かって) 頼むぞ、最後の砦！

市川さん：もう、だめ。もう辞めた(笑)。

旗野さん：新美さんは俺に「頼むぞ、最後の砦」と言われても、何十年も前から「もうだめ。もうだめ」って言うてんの。これがいいんです(笑)。

“新漏水侯病の話”よりも“なんなんだ”を大事に一若い世代の人へのメッセージ

旗野さん：先ほどの質問と同じで、メッセージなし。はなっからあんまり期待してないというか。今日のこの場面や、この時間を大事にしてもらいたいとか、楽しんでもらいたいっていうか。まるで訳のわからないように盛り上がってるこの話から、自分に都合のいい話として、それをメッセージにすればいいっていうことですよ。みんな大事って言えばみんな大事なんだけど、あなたが、その中から旗野はこういったことを帰り土産の言葉にして欲しいんじゃないかなって、あなたが思ってくれたらいい。多分、全部が大切な話で、全部が下らない話だと僕は思ってるから。

新美さんの話もそうだけでも、よくこういうパターンあるんです。小学生が来て、「僕たちはどうすればいいんでしょうか」みたいなさ。困った質問だなあって。そうすると子どもたちが「ぼく、今日の話聞いてお医者さんになると思ってます」なんて。素晴らしい答えだ、やりがいある集会だ、みたいな。そんなつまらないじゃないですか。つまないって言う言い方はよくないな。そういう人があってもいいわけですよ。そうやってお医者さんになるきっかけができた人もいっぱいだし、そんなことをすっかり忘れる人生っていいと思うし。

ただ、「なんだか知らんけども千唐仁に行ったら、うちのじいちゃん、ばあちゃんよりも年はとってるくせにみんな元気そうで楽しそうでどこが水侯病患者かわかんねえって、旗野さんが冗談で言ってたけども、あれはやっぱり『ニセ患者』じゃないかって僕は思いました」って書けないですよ、なかなか。だからそれを正直な雰囲気を書くようにするっていうのがとても大事なような気がするとか。なんであんな元気なんだろうって。学校でいろいろ聞く水侯病の患者さんとはちょっと違うみたいで、「なんなんだろう」あれは、みたいな。むしろこの「なんなんだろう」が大事で、「102歳まで歌を歌って生きる患者なんてありえない。棄却されて当たり前だと僕は思いました」ってほうがよっぽど素直じゃないかと。で俺、認定審査会ってずっと批判してきたけども、最近やっぱり正しい会じゃないかなと思うんですよ。正しいかなって、渡辺参治さん、102歳であんな歌を歌って、最近よぼよぼでね、車イスに乗ったりするからようやく普通の老人げに見えてきたけども、水侯病患者であるかどうかって言うともう、やっぱり「ニセ患者」ってのが正しいんじゃないかなって。さあどうする？ そのままレポートに書けないでしょ(笑)。

まとまらない話が大好きですね。てんでバラバラで、ハプニング話がいっぱい溢れるほど出て、なんか安田、楽しかった。お土産もいっぱいもらったし、と書いてもらえればいいんじゃないかな。

患者さんには長生きして欲しいとは思ってるんですけども。でも水侯病の話を正しくしようとすると、肝心の話が本当するするって皆抜けていく気がするんですよ。やっぱり渡辺参治さんは102歳で歌っている、という仰天するような、その中身の大事な話。で、たまたま、「え、水侯病でもあるんですか」みたいな。そういうタイプの水侯病もあるんだよ、って言うことを誰かがきちっと言っとかないと。どう見たって「ニセ患者」だよなあっていう人だっって、実は水侯病の被害者なんだってこと。

川筋で生活する人たちとの出会い直し

旗野さん：旗野さんが川筋の人たち、新美さんたちとの関係の話をしているわけだけでも、こういう関係。水侯病事件がなければ、ひょっとすると足を運ばなかった場所なのかもしれない。車で5分もかからないし、中学の学区としてはこの千唐仁のいわゆる同級生もいっぱいいたりした。私の同級生も認定申請してるんだけど、この事件がなければただの同級生で終わったから、足を運ぶってことはなかったと思うんですよ。特に船大工の遠藤武さんとは子どものときはよく舟遊びっていうか、冬は阿賀野川の堤防で竹スキーをやったんです。あの頃は子ども会とかはなく中学生から小学生まで、縦系列で軍団があって、とにかくよく遊びに行ったんですね。ところがEさんはもう、とにかく職人的なおじいさんでね、とっても怖かったんです。いつも無断で舟遊びをして、船をこっそりだして向こう岸まで行って、向こうの五泉の畑を荒らして、野菜を盗んで帰ってきたりとかね。まあそういうことを私たちが子どもの頃にしたらんだけど、Eさんが水侯病だということは実は全く知らなかった。

いつもEさんのところにお茶飲みにくる、新潟県で最初の女性校長になった田沢カネさんといううちのお袋と同級生の方がたまたま「ほら、Eさんのじいちゃん水俣病らしいから、今度話を聞きにいて申請してやるとかした方がいいよ」って言って、「え、あのじいちゃんちょっと苦手な怖そうだ」って言ったら、「いや、そうでもないよ」って言われて、恐る恐る訪ねたのがきっかけというか。だからせいぜいそんなもんで、ほとんど川筋の人たちとの行ったり来たりの関係はなかったんです。

やっぱり、まさに新美さんのお向かいのIさんちに水俣のボランティアをやろうとして訪ねたのがきっかけ。それも最初は断られた（苦笑）。まさかこんなに延々と、腐れ縁が長くなるとは思わなかったし、自分の人生というか生きざまもずいぶん様変わりしたなど。

もっと言うと、20代の頃はこの仕事（大工）も嫌で嫌で仕方なかったのよね。長男・次男もみんな捨てて家出したのに、三男の俺がなんで跡継ぎしなきゃなんないんだって、非常に理不尽というか、もう反発心ばかり。でも、いろいろあって、こういう人たちと出会ったら、まんざらでもないなど。仕事も非常に面白くなっていうか。

Eさんの窓ガラスが割れてるから、大工だから直してやるよって言ったら「余計なことするな」と。毎年、花一輪、朝顔がそこから咲いて顔を出してくれるんだと。もう良寛様みたいなことを言うんですよ。一時、生活保護受けたり大変な暮らしぶりしているのに、割れガラスを塞がなくていいって言うんですよ。その花一輪を愛でる気持ちを大事にして生きる人と出会えたことはラッキー。やっぱり水俣病事件というか、「あそこんちも行ってやったら」という声がなければ、全く縁がなかった人じゃないかと。それが映画「阿賀に生きる」の大事な主人公になっちゃうって。今はもうお二人とも亡くなってしまったからね…。振り返れば、あの映画はますます宝物になるし、こうやって全く出会ったこともない皆さんに伝える術として映画という形になっている。自分だって、まさか映画を作ろうとは思わなかったけども。たまたま、佐藤真と出会ったことで映画になったし…。だから、そういうことで言えば自分の人生そのものもやっぱり、圧倒的にこの水俣病事件と出会ったおかげで至ることは十分、言えると思う。

